

会 議 録

1 会議名

令和3年度 上越市・妙高市在宅医療・介護連携推進協議会

2 議題（全て公開）

- (1) 上越市・妙高市在宅医療・介護連携推進協議会について
- (2) 専門部会における令和2年度の取組内容と令和3年度の取組方針案について
 - ①入退院時連携推進部会
 - ②対人援助スキルアップ部会
 - ③急変時対応部会
 - ④市民啓発部会

3 開催日時

令和3年7月2日（金）午後7時から午後8時30分まで

4 開催場所

上越市教育プラザ 大会議室

5 傍聴人の数

0人

6 非公開の理由

—

7 出席した者（傍聴人を除く）氏名（敬称略）

委員：高橋慶一、長谷川正樹、渡辺正、押山貴光、揚石義夫、相澤由美子、浅野広美、小宮山陽子、藤本智恵、森橋恵子、早津敏彦、小林奈麻美、丸山許江、関原礼敏、石田さとみ、山田洋子
(出席16人 欠席0人)

事務局：上越市

- ・笠原浩史福祉部長
- ・すこやかなくらし包括支援センター
渡辺晶恵所長、岩崎一彦次長、柳澤明美次長、高宮輝行上席社会福祉士長、佐藤麻由子保健師長、板垣綾子主任、坪井裕章主任、岩井美晴主任、菅井祥太主任
- ・高齢者支援課
小林元課長、廣瀬志保作業療法士長

妙高市

・福祉介護課

岡田雅美課長、阿部光洋課長補佐、保坂あかね係長、
長谷川美代主査、原田浩成主査

8 発言の内容（要旨）

○ 開会

○ 挨拶 笠原福祉部長

○ 委員紹介 委員、事務局の紹介

○ 議事

(1) 上越市・妙高市在宅医療・介護連携推進協議会について

<資料1に基づいて説明>

(2) 専門部会における令和2年度取組内容と令和3年度取組方針案について

<資料1及び資料2に基づいて説明>

(意見交換)

小宮山委員：入退院時連携推進部会に参加している。

令和3年3月に高田地区のケアマネジャー研修会に病棟看護師が参加し、地域連携連絡票の目的やケアマネジャーの思いを直接聞くよい機会となった。その後、院内の退院支援委員会にて還元し、病棟看護師からは、ケアマネジャーから患者のADLや家族の状況、認知症の有無等について、詳しい情報を得たいとの意見があった。ケアマネジャーからの意見を直接聞くことで、患者が在宅に戻った姿をイメージすることができるようになっていくと思うので、今後も是非参加していきたい。

相澤委員：平成29年度から在宅医療介護連携推進協議会に携わっている。

当事業の評価に難しさを感じている。事業の取組は量と質の両面で評価する必要があり、県からはデータを扱う注意点として、レセプトデータは量的な場面ごとの取組状況を確認することができるが、見えない質的部分の評価をどのようにするかが重要と説明を受けた。県からアドバイス等あれば教えていただきたい。

山田委員：県ではレセプトデータ等の評価を行う研修を実施している。データの評価については、目的や目標に合わせて評価していく必要があり、従事している人の声や住民にどのような変化があったか、というところも捉えながら評価していく必要がある。また、事業の取組

の効果が非常に上がってきていると思うが、目指しているものについて、現在どこまでできているかを客観的に見てほしい。

揚石委員 : 事業の各部会の取組では「その人の思いを尊重する」ことがキーワードになっていると感じている。その人の思いを尊重することで、本人や家族、さらには専門職の満足につながり、その満足をどのように質として評価していくかを考えていく必要がある。例えば、アンケートの実施も考えられる。どれくらい笑顔が出ているか、仕事に対してのモチベーションが上がっているか、といったところを目指していけば、今後も非常によい取組になるのではないか。

石田委員 : 行政の働きかけにより、介護保険サービスの利用申込の際に、地域連携連絡票が使用されるようになり、ケアマネジャーの業務が軽減したと感じている。ただ、全ての事業所が使用しているわけではないため、引き続き行政から周知してほしい。また、退院支援において、コロナ禍の影響で本人と会えないため、アセスメントの面で苦慮している。

小林課長 : 市内の介護保険サービス事業所の159事業所のうち、93事業所が地域連携連絡票を使用している。使用していない事業所については、今後働きかけていきたい。

関原委員 : 本人の意向を重視したいが、どうしても家族の意向が重視される場面が度々見受けられ、人生会議の啓発は重要だと考えている。市民啓発部会では40歳から60歳の世代への啓発を進めていくとのことだが、介護保険サービスを利用しながら生活している、60代より上の年代の方々にも、人生会議に触れる機会を設けていく必要があると感じている。

押山委員 : 入退院時連携推進部会にお願いがある。循環器連携パスにおいて退院したが、すぐに入院になるケースがあることを聞き、改めて在宅での服薬管理が重要であると感じている。適切に服薬ができることで、様々な職種が介入しやすくなった事例があるため、薬剤師として入退院時の場面で、ケアマネジャー等の他の専門職と連携していきたい。また、地域ケア個別会議の助言者として参加しているが、会議に参加することで連携がしやすくなると感じている。

長谷川委員：単身の高齢者が救急外来に搬送され、病院としてその人に何をすればよいのか、その人の情報が全くない状態で受け入れなければならないケースが多々ある。そうした中で、救急医療情報キットが適切に整理されていれば、病院としての対応が随分変わってくると感じている。また、在宅で主治医に見守られながら看取った方がどのくらいいるのか、その人の希望に沿って最後を迎えられた方がどのくらいいるのか等、看取りの数字がわかるとよいと感じる。

小林課長：救急医療情報キットについては2年に一度更新しているが、情報が更新されていない方もいる。この点をどうするかが課題であり、今後検討を進めていきたい。

渡辺委員：歯科医師として、看取りより前の段階での関与も重要だと感じる。本人にとって食べることは非常に大切であり、例えば、食べられなくなっても、ゼリーだけでも飲んでもらえないかというようなことが、本人の思いに添うことになるのではないかと思う。今後、歯科医師会として少しでも力になりたい。

浅野委員：いかに本人の思いを引き出すかが大切だと感じている。入退院時連携推進部会の中で、コロナ禍におけるケアマネジャーと病院の連携ガイドラインの在り方を考えてほしい。

早津委員：病院に勤務しているが、病院の中で他の専門職から指摘されて気づくことが多く、対人援助スキルアップ部会の取組においても、専門職が陥りがちな点等、他の専門職から指摘されて気づくことが多いと感じている。理学療法士会の研修会の中においても事業の取組としてそうした気づきを報告し、専門職の気づきを促すことにつなげていきたい。

小林委員：病院に勤務していて感じることは、食べることは患者にとって非常に大切で、思いが強いと感じている。病院だけではなく施設とも連携しているが、患者の背景には、家族がいない、連絡が取れないという人がおり、そのような人の連携は難しいと感じる。まだ手探り状態ではあるが、その人の食べる喜びから生きる喜びにつなげていけるように連携していきたい。

丸山委員 : 事業が4つの部会に分かれていたとしても、その人の思いを尊重し引き出すことがキーワードであり、すべてつながっていくということを改めて感じた。多職種で情報を共有して意見を出し合っていくことが重要だと感じている。また、救急医療情報キットの更新については、訪問看護として関わることがあるのではないかと感じている。

揚石委員 : コロナ禍の影響で、本人と会えないという話があったが、今後はコロナ終息後を見越しながら事業に取り組んでいく必要があると考えている。この点においては、おそらく各病院において考えがあると思うので、連携センター等と随時情報交換されてはどうか。

○ その他

MCネットについて

システムの老朽化、セキュリティ面の脆弱等の理由により、サービス提供が終了したことに伴い、今後は9月頃を目途にメディカルケアステーション(MCS)という新しいシステムに全面移行する予定になっている。7月中旬から下旬にかけて研修会を予定している。

○ 閉会

9. 問い合わせ先

福祉部 すこやかなくらし包括支援センター (福祉交流プラザ 2階)

TEL : 025-526-5623

E-mail : sukoyaka@city.joetu.lg.jp

10. その他

別添の会議資料も併せてご覧ください。